

ライフ・ヒストリーに現われた天皇

篠 原 徹

-
- | | |
|----------|---------------------|
| 1. はじめに | 3. ライフ・ヒストリーに現われた天皇 |
| 2. 一枚の写真 | 4. おわりに |
-

論文要旨

「聞き書き」は民俗学の資料収集の主要な方法である。そしてどんな「聞き書き」であれ、それは語る人の体験と伝承されてきた口承が多かれ少なかれ弁別できない形で融合している。その「聞き書き」のなかで伝承されてきたものによる程度が大きければ大きいほど、より民俗的な現象として資料化されてきたといえる。つまり個人的な体験は体験そのものが民俗的な現象でなければ（たとえば民俗宗教のようなもの）、民俗学は「聞き書き」のなかから体験を排除することによって文字ある世界で「文字なき広大な世界」の歴史資料化を試みてきた。

体験そのものが民俗的なものではないとは、それは現実の社会的な問題と激しく交錯するような天皇制であるとか公害であるとかを想定すればよい。しかしオーラル・ヒストリーといわれるものを民俗的世界のなかで体験史と口承史に分けること自体が無意味であろう。その無意味さは特に個人的人生を語るライフ・ヒストリーにおいてはもっとも集約されたものとして具現化する。けれども極端にいえば伝承を含まない体験のなかに民俗を見出すことだって可能である。天皇制の民俗を巡る問題とはこのようなものなのではないのか。天皇制の歴史に民俗性をみるとより現に生きている人々（文字ある社会で「文字を使わない世界」の人々）のなかの天皇制を摘出することこそが民俗学である。

一人のライフ・ヒストリーを聞くなかで戦前の天皇制イデオロギーの具体化である「御真影」の到達しなかった山村の存在の発見から「民俗のなかに現われる天皇」の民俗学的重要性を指摘したい。柳田国男が『先祖の話』のなかで敗戦という事態を迎えて「家はどうなるのか、又どうなって行くべきであるか」と問い合わせ、民俗学に家に関して「若干の事実」を集めめる必要を悲痛に表明したように天皇制に関しても「若干の事実」を民俗学は集める必要がある。